

2 武器からみた伯耆国分寺古墳の年代

池淵 俊一

はじめに

小稿は、伯耆国分寺古墳出土武器のうち、型式がある程度判明しているヤリ、鉄鏃、短刀を取り上げて基礎的な検討を行い、当古墳の編年的位置の検討の一助とすることを目的とする。

古墳時代前期の鉄製武器類は、大きく旧型式群と新型式群に大別され、その型式変遷上の特徴は、新型式群出現後も旧型式群が一定期間共存する点にある〔池淵 2014〕。このため個別器種の型式変化による編年は困難であり、鉄鏃の一部などを除けば、「組合せによる編年」〔森下 2005〕の材料としかなり得ない。さらに、特に刀剣類に関しては、鏡などと同様に長期間伝世する事例が知られており、編年基準資料としては使いにくい。ただ、他の副葬品の編年と照合しつつ、個別型式の上限年代をおさえることによって、個別古墳の編年的位置づけに寄与することは一定程度可能と料する。

具体的な作業としては、中国四国前方後円墳研究会編年〔岩本 2018；以下 I～VI 期の時期区分は中四研編年の時期区分を示す〕と照らし合わせることによって各型式の消長を検討し、その重なりから当古墳の築造年代を類推してみたい。なお、当古墳には 2 つの埋葬施設が想定され、武器もそれぞれから出土しているが、小稿では一括して扱う。

個別器種の年代観の検討

① ヤリ

装具による編年観 ヤリについては豊島直博によって総括的な編年研究が行われており、装具の型式分類から、糸巻底辺型→糸巻頂点型→直線 A 式→直線 B 式の編年案が示されている〔豊島 2008〕。

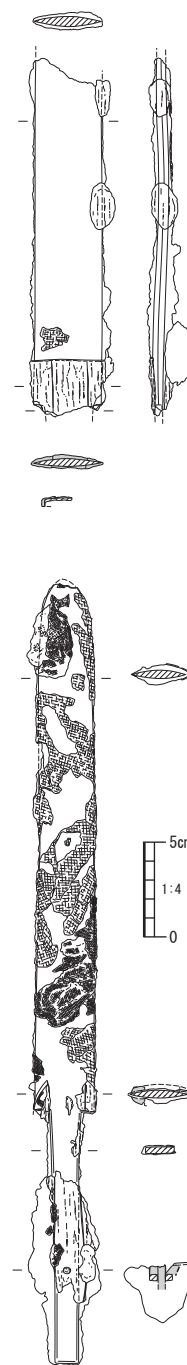
この変遷観は基本的には妥当と考えるが、あくまでも多量出土事例における各型式構成比の量的推移として把握できるものであり、単独資料としてのヤリの編年的位置づけは難しい。例えば最古とされる糸巻底辺型は IV 期までは確実に存続する一方（会津大塚山）、後出するとされる糸巻頂点型や直線型も I 期には既に出現している（西求女塚・神門 3 号）。

伯耆国分寺古墳鉄ヤリの位置づけ 伯耆国分寺古墳出土の鉄ヤリは糸巻底辺型と直線型に属する（第 33 図）。このうち糸巻底辺型は、先述のとおり I 期に出現し IV 期まで存続するが、ここでは呑口部の平面形状に着目し、検討を試みたい。即ち、呑口部が直線的な三角形をなすタイプ（三角 a 型）、呑口部の三角形がやや弧を描くタイプ（三角 b 型）、呑口部が完全な円弧をなすタイプ（円弧型）に分類する。これらの出現時期を中四研編年に照らし合わせてみると、糸巻底辺型のうち I 期段階のものはほとんどが三角 a 型に属する。一方、三角 b 型や円弧型は II 期以降から一般化する（第 4 表）。

伯耆国分寺古墳の糸巻底辺型ヤリは呑口部が部分的にしか残っていないため詳細は不明だが、残存部は直線ではなく緩いカーブを描くことから、三角 b 型または円弧型に属する。直線型が三角縁神獣鏡 C 段階から盛行するという指摘〔豊島 2008〕も踏まえれば、当古墳の鉄ヤリは最古段階ではなく II 期以降に属する可能性が高い。

第4表 ヤリの呑口部形態と本体の茎形制

中四研 編年	古墳名	旧国	呑口部形態				茎形制			
			三角 a	三角 b	円弧	直線	短茎		長茎	
							直茎 a	直茎 b	直茎 c	細長茎
I	妙楽寺 4A2 号	但馬	○					○		
I	弘住 3 号	安芸	○				○			
I	中出勝負峠 8 号	安芸	○					○		
I	神門 3 号	上総	○				○			
I	神門 4 号	上総	○				○			
I	美和山 32 号	因幡	○							○
I	弘法山	信濃	○				○	○		
I	国森	周防	○				○			
I	内場山	丹波	○					○		
I	ホケノ山	大和	○							
I	中山大塚	大和	○				○			
I	権現山 51 号	播磨	○							○
I	日原 6 号	伯耆	○					○		
I	神原神社	出雲		○				○		
I~III	宇那木山 2 号	安芸		○			○			
I	西求女塚	摂津	○	○	○	○	○	○	○	○
II~III	東山	伊勢				○		○		
II	雪野山	近江		○		○	○	○	○	
II	椿井大塚山	山城		○		○	○	○	○	○
II~III	分校カン山	加賀		○						
III	高松茶臼山	讃岐				○		○		
II~III	長迫 2 号	備後		○				○		
II~III	メスリ山	大和	○	○	○	○	○	○	○	○
II~III	黒塚	大和		○		○	○	○	○	○
III~IV	伯耆国分寺	伯耆			○	○				○
IV	会津大塚山	陸奥			○					
IV	安土瓢箪山	近江				○				○
IV~V	辻	筑前		○		○		○		○
IV	花光寺山	備前	○			○		○	○	○
IV	大迫山 1 号	備後			○		○			
IV	免ヶ平	豊後				○	○	○		
IV	尼塚	山城			○			○		
IV	寺戸大塚（前）	山城				○		○		○
IV~V	奥才 14 号	出雲	○					○		
IV~V	三池平	駿河	○					○		
IV~V	熊本山	肥前				○		○		
V	上野 1 号	出雲				○				
V	生山 29 号	因幡	○							○
V	辺田 1 号	上総				○		○	○	
V	朝倉 2 号	上野			○					○
V	岩崎山 4 号	讃岐	○	○		○		○	○	
V	園部垣内	丹波	○	○	○	○	○	○	○	○
V	一貴山銚子塚	筑前		○	○	○		○		
V	瓦谷 1 号	山城	○			○	○	○		
V	長法寺南原	山城			○	○	○	○		
V	東大寺山	大和	○	○	○		○			○
V	上殿	大和						○		
V	谷畑	大和			○	○		○		
V	城山 2 号	大和				○		○		
V	新沢 500 号	大和			○	○		○	○	○
VI	和泉黄金塚	和泉				○		○	○	
VI	弁天山 B3 号	摂津				○		○		
VI	松林山	遠江		○		○		○		
VI	富雄丸山	大和			○	○				



第33図 伯耆国分寺古墳出土のヤリ

ヤリ「本体」型式からみた年代観 次にヤリ「本体」について検討を行う。当古墳の糸巻底辺型のヤリ(第33図下)は、本体が細長茎タイプの短剣を採用するタイプである。古墳時代前期のヤリは長茎・短茎の両者がヤリ本体として採用されるが、本来的には、短茎(直茎a・b)=ヤリ、長茎(直茎c・細長茎)=剣、をセットとして作り分ける意識があったと考えられる〔池淵1993・2003〕。

こうした観点から改めてヤリ本体の茎形制の推移を検討すると、I期で長茎タイプの本体を採用する事例は非常に少なく、長茎タイプのヤリが一般化するのII・III期以降であることがわかる(第4表)。これは、当初はヤリ・剣の作り分けが意識されていたものが、ヤリの多量副葬を契機に、鉄本体と柄の装着が別個の体制下で行われていたことから、多様な形態のヤリ本体がヤリ柄装着の工房に集積されたことに起因するものと考えられる〔豊島2008〕。

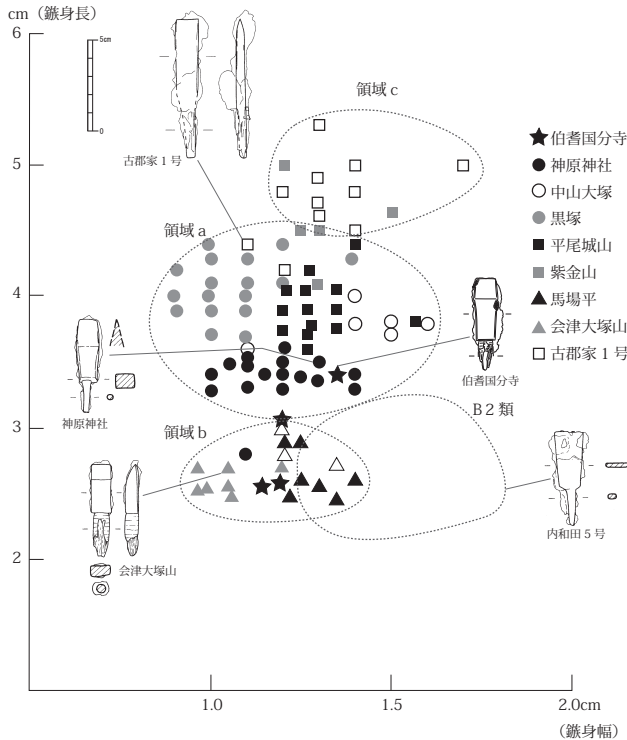
以上、装具及びヤリ本体の検討から、当古墳のヤリは最古段階ではなく、II期以降に位置づけられる。

② 鉄 鍬

研究略史 鉄鍬は刀剣類と比較すると、比較的型式学的変化が明瞭で、かつ消耗品で伝世が生じにくいことから、「かたち」による編年が可能な数少ない資料といえる〔森下2005〕。ただし、当古墳出土のような有稜系鑿頭式鉄鍬については、定角式など他の鉄鍬形式と比較すると、系統だった変化を追うことが難しい。これは定角式や柳葉式に比べ生産量が少なく、断続的な生産であったことに起因するものと思われる。

第5表 鑿頭式鉄鍬の属性一覧

中四研 編年	古墳名	所在地	法量				平面形			刃部形態		茎断面	
			B2類	B1類 領域a	B1類 領域b	領域c	A1式	A2式	B式	両刃	片刃 偏刃	円形	方形
I	内和田5号	丹後	B2				A1			両			方
I	内場山	丹波	B2				A1			両		円	方
I	郷境3号	備中	B2				A1?			両		円	
I	西一本杉ST009	肥前		a			A1			両		円	方
I	中山大塚	大和		a			A1			両			方
I	森尾	但馬		a			A1			両			
I	駄坂・舟隠9号	但馬		a			A1			両		円	
I	西求女塚	摂津		a			A1	A2		両		円	
I	石鎚山1号	備後		a			A1	A2		両			方
I	権現山51号	播磨		a				A2			片		方
I	高橋仏師1号	伊予			b			A2		両		円	
I	元稻荷	山城			b			A2		両			
I	神原神社	出雲		a					B	両		円	
I~II	朝日谷2号	伊予		a				A2				円	
II	椿井大塚山	山城		a				A2		両		円	
I~III	宇気塚越1号	加賀			b			A2		両		円	
II~III	黒塚	大和		a				A2		両	偏・片	円	方
I~III	新豊院D2号	遠江		a	b			A2		両			
III~IV	伯耆国分寺	伯耆		a	b				B	両		円	
IV	平尾城山	山城		a				A2		両		円	
IV	花光寺山	備前			b			A2		両			
IV	寺戸大塚(前)	山城		a				A2		両		円	
IV	紫金山	摂津		a					B	両		円	
IV	中山2号	越前			b			A2			片	円	
IV	会津大塚山	陸奥			b			A2			片	円	
IV~V	秋合1号	駿河			b			A2		両	片	円	
IV~V	神田3号	上総			b			A2			片		方
V	馬場平	遠江			b			A2		両	片	円	方
V	六部山3号	因幡		a				A2			片		方
VI	松林山	遠江			b			A2		両		円	
VI	(参)古郡家北棺	因幡		a		c	A1	A"		両			方



第34図 有稜系鑿頭式鉄鍔（B1類）の鍔身法量分布

前期後半（IV～VI期）の出土例は少なく、V期ではほぼ消滅する状況が確認できる。前期末～中期初頭（VI期）にも若干出土例が認められるが（松林山）、伝世等の例外的存在とみなしてよい。

② 型式変化に関する考え方 第34図は鑿頭式鉄鍔がまとまって出土した一括資料の法量分布を示したものである。これをみると、各古墳の一括資料ごとに法量のバラツキが少なく、凝縮性が高い点が確認できる。これは各古墳の一括資料が、それぞれの古墳築造を契機に一括生産された可能性を示すとともに、その製作にあたっては、個別に規範となる特定のモデル・範型があったことを暗示する。

このように、個別の副葬鍔群を製作する際には、それぞれモデルとなる鉄鍔があり、その模倣・反復の過程で型式変化が生じたものと理解できる。そして、理論上はそのモデル模倣の反復過程を系列として把握することによって型式学的変化の理解が可能となる。

残念ながら鑿頭式鉄鍔は、資料不足や形態上の明確な特徴に乏しい等の事由から、そのモデル模倣の反復過程＝系列を追うことは非常に困難だが、ここでは諸属性の検討から敢えて一案として系列案を提示してみたい。

③ 有稜系鑿頭式鉄鍔（B1類）の諸属性の変化 第5表は、中四研編年に基づき鑿頭式鉄鍔出土古墳を配列し、諸属性（法量・平面形・刃部形態・茎断面）の消長を検討したものである。

平面形は川畑の分類に基づき、刃部が広がる方頭A1式、鍔身横幅が一定なA2式、鍔身中心部に最大幅のあるB式と分類する〔川畑2009・2018〕。第5表のとおり、方頭A1式はI期に限定され、A1式からA2式へと変化する川畑の指摘を追認できる。なお方頭B式は類例は神原神社、伯耆国分寺、紫金山のみでI～IV期にまたがって存在する。

次に法量を検討すると、鍔身長が3.0～4.5cmで典型的な鑿頭式鉄鍔である領域aは、前期を通じて存在するが、概ねIV期までで収束する。一方、鍔身長3cm以下でやや寸詰まりの領域bは、既にI期から認められるが、IV・V期と新しい段階の出土例が多く、両者は重複しつつも後者が新しい傾向が認められる〔池淵2002〕。

前期の鑿頭式鉄鍔については、既に先学による研究の蓄積がある〔南部2001、池淵2002、高田・東方2013、川畑2018など〕。本稿ではこれらを参考にしつつ、特に有稜系鑿頭式鉄鍔について検討を加え、当古墳出土資料の位置づけを試みる。

鑿頭式鉄鍔の大別 鑿頭式鉄鍔に関しては過去に幾つかの分類案があるが、大別は旧稿を踏襲し、大型で平根系のA類と小型で有稜系のB1類、小型で平根系のB2類に大別する〔池淵2002〕。このうち有稜系のB1類については、鍔身長からさらに3つに細分する（第34図：領域a～c）。

鑿頭式鉄鍔の編年

① 一般的傾向 第5表は、鑿頭式鉄鍔のうちB類について各出土事例を中四研編年に併せて配列したものである。これをみると、基本的には前期でも前半（I～III期）に集中し、

刃部形態は、両刃タイプが前期を通じて存在するのに対し、片刃・偏刃タイプはI期に若干存在するものの、大半はIV期以降の事例である。また茎断面形は円形と方形が各時期で混在し、現状では明瞭な時期差を確認できない。

④ 有稜系鉄鍬 (B1類) の型式分類 これまでの諸属性の検討や過去の研究事例〔南部 2001、川畑 2009〕を踏まえ、有稜系鑿頭式鉄鍬を4つの系列に分類する。

I類…領域aのうち、鍬身長3～4cmの中型品。南部I類。

II類…領域aのうち鍬身長4cm以上の大型品。南部II類。

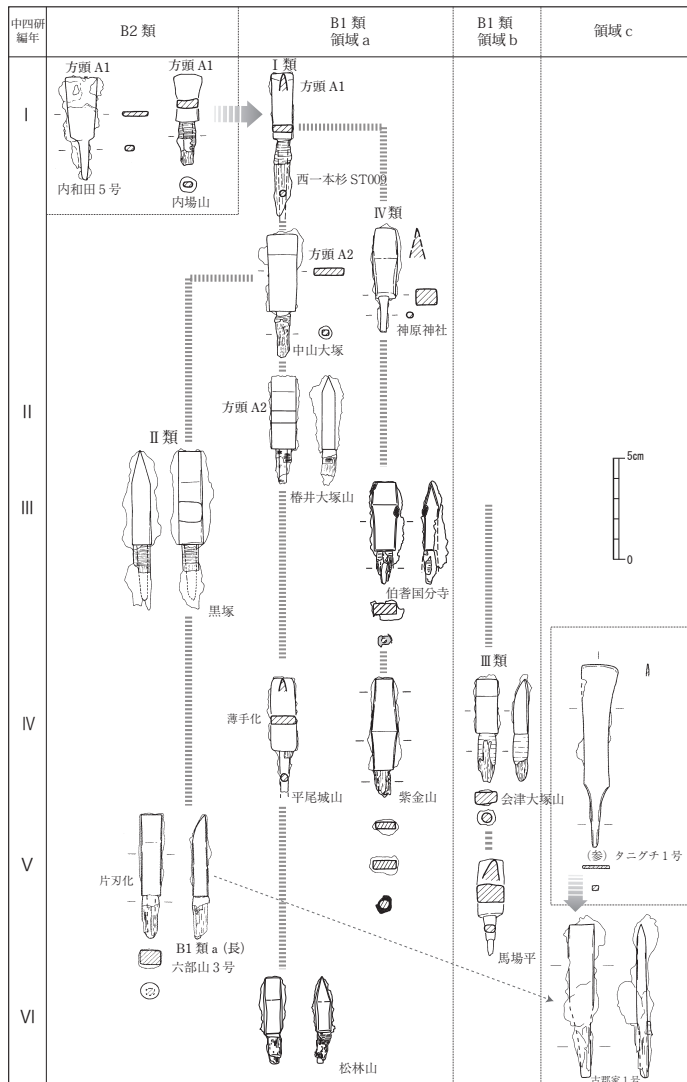
III類…領域bの寸詰まりタイプで鍬身長3cm未満。南部III類。

IV類…鍬身側辺が内湾し、鍬身中央に最大幅がある一群。川畑B類に相当する。

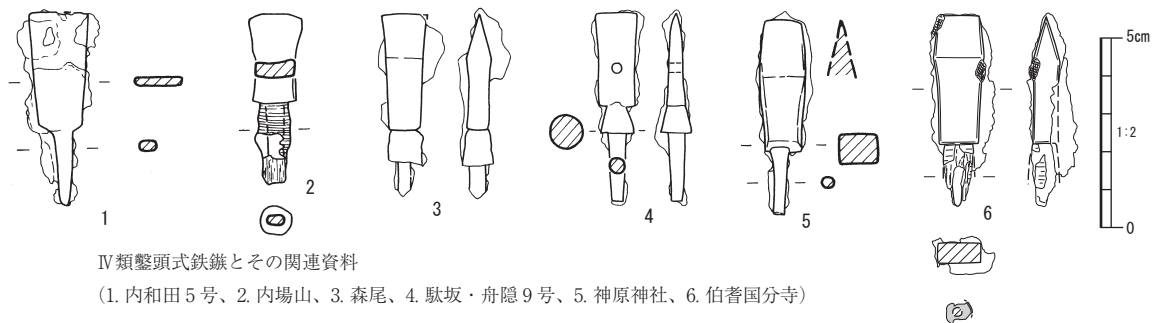
⑤ 鑿頭式鉄鍬の編年 以上の分類に従い、各系列ごとの変化を概観する(第35図)。有稜系鑿頭式鉄鍬のうち、最も一般的なI類は、弥生時代終末期の平造りのB2類より派生してI期初頭には成立したと考えられる。出現期には刃部が幅広のA1式が卓越し、II期以降はA2式にほぼ統一される。その後の型式変化は不明瞭であるが、IV期には薄手化が進行する(平尾城山)。

またI期段階には、I類から鍬身の長い系列(II類)が派生・出現する。II類の分布は現状では大和にほぼ限定される。IV期以降は類例に乏しいが、V期に属する数少ない事例として六部山3号例がある。ただし当例は両刃ではなく片刃であり、省略化が看取される。

III類は現時点では新豊院D2号例が最



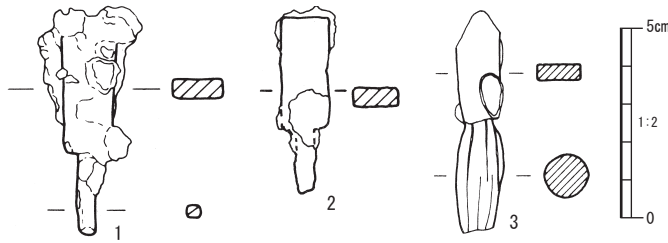
第35図 有稜系鑿頭式鉄鍬 (B1類) の編年



IV類鑿頭式鉄鍬とその関連資料

(1. 内和田5号、2. 内場山、3. 森尾、4. 駄坂・舟隠9号、5. 神原神社、6. 伯耆国分寺)

第36図 山陰地域周辺の鑿頭式鉄鍬



第37図 長瀬高浜遺跡出土の有稜系鉄鎌
1. SI78 2. 10SK02 3. SI02

古となり、前期前半には既に出現しているが、先述のとおり盛行期はⅣ期以降である。Ⅲ類は分布が東海を中心とする東日本で盛行し、また片刃の事例が多い点も注目される。

Ⅳ類はⅠ期後半には既に出現している（神原神社）。類例に乏しいが、Ⅳ期まで存在し（紫金山）、刃部長が長大化・弛緩化する。

する。

伯耆国分寺古墳の位置づけ 以上の編年案をもとに、伯耆国分寺古墳資料の位置づけについて検討してみたい。伯耆国分寺資料はⅣ類に属し、同タイプとしては神原神社古墳例と紫金山例がある。その他、鎌身側辺が内湾し平面形がⅣ類に類似する事例として、森尾古墳例や駄坂・舟隠9号例などがあり、紫金山例を除くと日本海沿岸に集中している点が注目される（第36図）。このように、類似する形態が分布的にもまとまりをみせることから、これらを一系列として理解することは妥当と考える。

当古墳例に類似するタイプとしては、形態的には神原神社例が最も近い。ただし当古墳例の方が、鎌身側辺内湾のカーブが緩くなり、鎌身が短小化するタイプが含まれている点から、やや後出のとみる。この点から、当古墳例は先行する神原神社古墳例をモデルとして製作された可能性を考えたい。紫金山古墳例はⅣ類に属するものの、形態的には神原神社・伯耆国分寺例とは隔たりがあり、直接的な系列関係は考えにくい。仮に同じ系列下で製作されたとすれば、その弛緩した形態から紫金山例が後出すると考えられる。

以上の点から、当古墳の鑿頭式鉄鎌は神原神社例より後出し、紫金山古墳と同時期かそれ以前、すなわちⅡ～Ⅳ期に属する可能性が高い。

鑿頭式鉄鎌の地域色 弥生終末期～古墳初頭の鑿頭式鉄鎌は日本海沿岸に集中的に分布する〔池淵2002〕。さらに但馬の森尾例と駄坂・舟隠9号例は鉄製篋被を伴う事例で、他地域では例を見ない。このような日本海沿岸地域における鑿頭（方頭）式への志向性は、六部山3号墳例や古郡家1号墳など前期末段階にも継承される〔高田・東方2013〕。また、前期後半の東海を中心とする東日本では寸詰まりで片刃のⅢ類が特徴的な分布を見せる。旧稿では有稜系鉄鎌の製作技術基盤を鑑み、畿内での一括生産を想定したが〔池淵2002〕、こうした地域性や先述の系列モデルを考慮した場合、有稜系鑿頭式鉄鎌の一部系列については地方生産も考慮に入れるべきかもしれない。

有稜系鉄鎌のうち、定角式鉄鎌は福岡県博多遺跡の事例から、畿内外でも生産を行っていることは確実視される〔久住2007〕。長瀬高浜遺跡は当地の拠点集落であるが、集落遺跡としては珍しく有稜系鉄鎌が多数出土し、それらのなかには鑿頭式鉄鎌も含まれる（第37図）。また、当遺跡では羽口の出土から鉄器生産を行っていたことは確実である。このように、当例は山陰における有稜系鉄鎌の地方生産の可能性を示唆する資料といえ、今後さらなる検討を要する〔池淵2005〕。

③ 短 刀

型式分類 短刀に関しては、そのみをとりにあげて検討を加えた専論は寡聞にして聞かない。小稿では、刃部長と茎長の法量的な分布傾向から、以下のように分類する（第38図）。

短刀 A 類…茎長が6 cm以上の一群。法量的にはバラツキが著しくまとまりがない。

短刀 B 類…茎長が6 cm未満の一群。刃部長により大型の B1 類と小型の B2 類に細分する。

短刀 A 類は、寺戸大塚例にみられるように、基本的には大刀のミニチュアとして理解できるものである。装具も落とし込み式（黒塚）と二枚合わせ式（紫金山）などがあり、定型化していない。また A 類では、多量副葬の事例は存在しない。

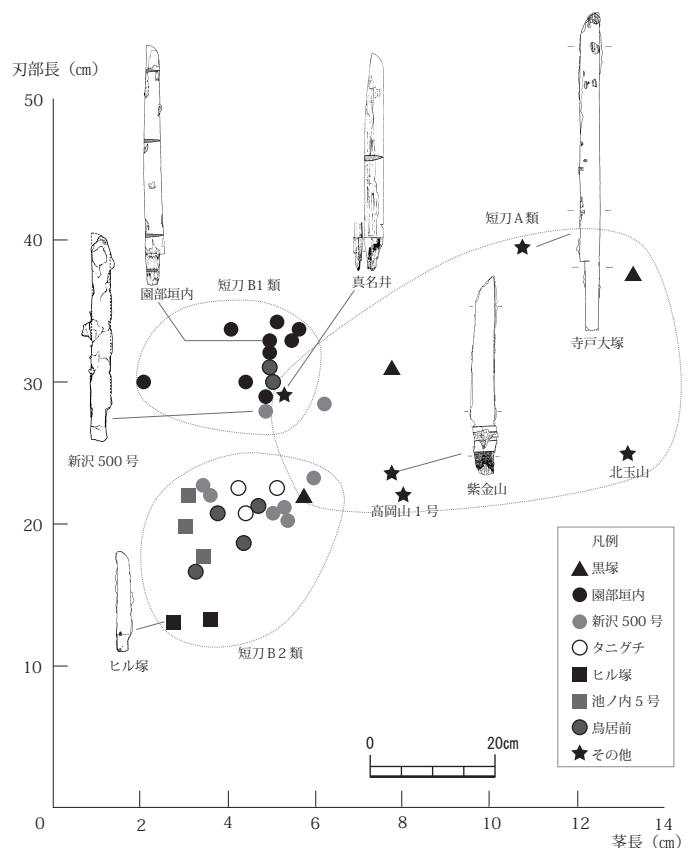
一方、短刀 B 類は、大刀とは全く異なる独立した一器種として成立したものである。装具も大刀のような落とし込み式ではなく、剣に類似した左右対称の多方向穿孔式の装具〔豊島 2008〕を採用する。出土状況も、剣と同じ場所から一括出土する事例（鳥居前・園部垣内）があり、剣と同様な扱いを受けている。また、多量副葬が認められるのも短刀 B 類の特徴である。

このように、短刀 B 類は、装具（多方向穿孔式）の定型化に応じて、短刀本体の方も装具が装着が容易なように茎が短小化した形態へと変化したものと考えられる。

編 年 第6表は短刀出土例を中四研編年にあわせて配列したものである。これを見ると、短刀 A 類と短刀 B 類は明確な時期差として分離可能である。すなわち、短刀 A 類はⅢ・Ⅳ期にほぼ限定される一方、短刀 B 類は、Ⅴ・Ⅵ期に限定される。また多量副葬の事例は総てⅤ・Ⅵ期に属する。なお短刀 B 類は、Ⅴ期は B1 類が主流であるのに対し、Ⅵ期になると B2 類が増加し、時期が降ると刃部が短小化する傾向が看取される。

このように、短刀は古墳時代前期後半を代表する武器の一つとして評価できるだけでなく、前期古墳編年の細分において有効な器種として活用できる可能性が高い。

伯耆国分寺古墳資料の位置づけ 当古墳出土の短剣は、欠損しているため全形は不明だが、茎が欠損する現状においても茎長が 7 cm 以上存在する点から、短刀 A 類に属



第 38 図 短刀の法量分布

第 6 表 短刀一覧表

中四研 編年	古墳名	旧国名	短刀型式			刀装具	備 考
			A 類	B 1 類	B 2 類		
Ⅱ～Ⅲ	黒塚	大和	○			落とし込み式	
Ⅲ	真名井	河内	○				
Ⅲ～Ⅳ	伯耆国分寺	伯耆	○			多方向穿孔式？	
Ⅳ	紫金山	摂津	○			二枚合わせ式	
Ⅳ	寺戸大塚	山城	○				
Ⅳ・Ⅴ	北玉山	河内	○				装具残存
Ⅳ・Ⅴ	高岡山 1 号	土佐	○				
Ⅴ	園部垣内	大和		○		多方向穿孔式	盒内より一括 10 点出土
Ⅴ	新沢 500 号	大和		○	○		粘土槨副槨より 19 点出土
Ⅴ	タニグチ 1 号	大和			○		両関
Ⅵ	鳥居前	山城		○	○	多方向穿孔式	石室内木箱中より短剣 21 とともに 9 本一括出土
Ⅵ	ヒル塚	山城			○	多方向穿孔式	棺外粘土床からヤリとして出土 (49 本)
Ⅵ	池ノ内 5 号	大和			○	多方向穿孔式	12 以上、両関、中細茎

中四研編年	鉄ヤリ	鑿頭式鉄鏃	短刀
I	■		
II	■	■	■
III	■		■
IV	■	■	■
V		■	
VI	■	■	

第 39 図 伯耆国分寺古墳鉄製武器の年代観

するものとみてよい。また多量副葬でなく少量出土である点も、短刀 A 類として矛盾しない。

装具は今ひとつ明確でないものの、報文中に述べられているとおり、茎部背側に木質が付着しない部分が認められる点から、多方向穿孔式の可能性が高い。豊島直博は、多方向穿孔式は前期後半から出現するとしたが〔豊島 2008〕、当古墳例は前期前半の事例（中山大塚）と前期後半の多方向穿孔式との間を繋ぐ資料となり得る可能性がある。

以上の点から、当古墳出土短刀は、Ⅲ～Ⅳ期に位置づけることができる。

結 語

これまでの検討から、伯耆国分寺古墳出土鉄製武器のうち、鉄ヤリは装具呑口部の形状やヤリ本体の検討から、中四研編年Ⅱ期以降、鑿頭式鉄鏃は神原神社古墳や紫金山古墳例との比較からⅡ～Ⅳ期、短刀は A 類に属する点からⅢ～Ⅳ期に位置づけられる（第 39 図）。

以上のように、個々の器種から想定される年代観は必ずしも一致していないが、これら各器種の年代観が重なり合うⅢ～Ⅳ期に当古墳の築造年代を求めるのが、現状では最も妥当な見解と思料する。

なお、当古墳武器組成には大刀が含まれないなど、当古墳の性格を考えるうえで重要な論点が存在するが、今回は十分な検討ができなかった。今後の課題としたい。

引用文献

- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』第 1 号 鳥根県古代文化センター
 池淵俊一 2002「神原神社古墳出土鑿頭式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』加茂町教育委員会
 池淵俊一 2003「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観 7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館
 池淵俊一 2005「山陰における古墳時代前半期鉄器の様相」『考古論集—川越哲志先生退官記念論集—』川越哲志先生退官記念事業会
 岩本 崇 2018「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房
 川畑 純 2009「前・中期古墳副葬品の変遷とその意義」『史林』第 92 巻第 2 号 史学研究会
 川畑 純 2018「鉄鏃」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』六一書房
 久住猛雄 2007「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』第 53 巻第 4 号 考古学研究会
 高田健一・東方仁史 2013「六部山 3 号墳の研究」『古郡家 1 号墳・六部山 3 号墳の研究』鳥取県
 豊島直博 2008『古墳時代前期の鉄製刀剣』2005（平成 17）年度～2007（平成 19）年度科学研究費補助金（若手 B）研究成果報告書 奈良文化財研究所
 南部裕樹 2001「銅鏃・鉄鏃」『寺戸大塚古墳の研究 I』（財）向日市埋蔵文化財センター
 森下章司 2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第 89 巻第 1 号 日本考古学会